

山行報告書

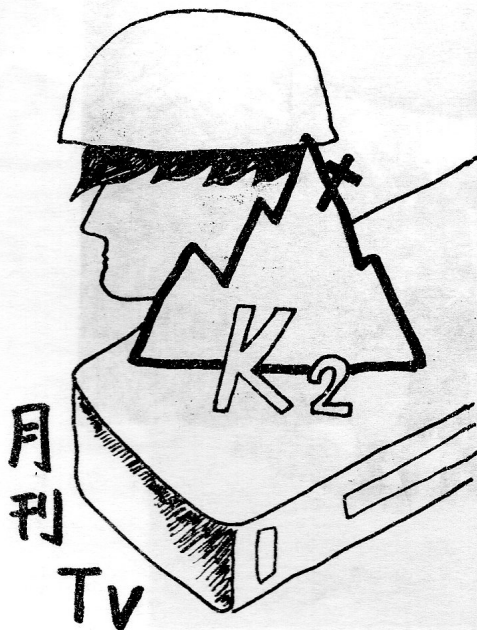
通算山行NO	NO・96A		報告者	高岡八千代
年月日	'97年 2月 8日(土曜日)～		年 2月 9日(日曜日)	
山行名	如月合宿			
山名	鳳凰三山 薬師岳(2,780m)・観音岳(2,840m)・地藏岳(2,764m)			
コース タイム 及ム	天気 (晴)	裾野 4:45 → 御殿場 5:05 → 夜叉神登山口 7:30 ~ 8:15 発 → 夜叉神峠 9:15 苺平 13:20 → 南御室 14:05		
標高差	△S夜叉神峠 ~ 辻山	≒ 1,200m	体力度	1・2・3・④・5・6
	▼T ~ G	≒	技術度	1・2・③・4・5・6
走行距離	下土狩 ~ 夜叉神登山口	≒ 150 K	展望度	1・2・3・4・⑤・6
参加者 役割	CL	後藤 隆徳 49	冬の鳳凰は久し振り。雪が少なく残念。	
	SL	大根田元雄 60	お腹が空いてしんどかった。	
	記録	高岡八千代 59	記録をとりながらの山行は大変でした。	
	医療	佐野 雅道 65	トレースが出来ているので歩きやすかった。	
		望月 明美 53	今年はエキサイティングな山を頑張るぞ。	
	食料	来生 博子 48	いつもながらの雪の感触がたまらない。	
	会計	加藤 秀子 48	テン泊の良さはテン泊でしか味わえない。いいね～。	
	ガイド	清水 准一 47	知り合った頃の昔を思い出す。懐かしいな～。	
一般	河野 仁美 28	一人歩きが多いが、大勢のパーティもいいもんですね。		
第1日目	<p>登山口で芦安の清水さん（CLの友達）と待ち合わせをする。清水さんと一緒に、唯一の若い娘さん河野さんが来る。河野さんは楡形中学の先生。若い人が一人いるだけで活気が出る。登山口には私達の他に何台か車があったので、道はついていだろうと思ながらレイホー7人と清水さん、河野さんの9人で登山開始。夜叉神峠までは休みなく登山、雪も少なくわりと楽だった。</p> <p>峠に出たら私の目の前に北岳、間の岳、農鳥岳が空の青さに、その雄大さを誇るかのように広がる。一瞬全ての事を忘れて見入ってしまう。しかし、目的地は未だ先。この雄大な景色に別れを告げ南御室に向け出発した。南御室への道は雪が多くなってきたが先発隊がいるため歩きやすい。途中3回の休憩をとる。2回目の休憩から3回目の休憩の苺平まで約1時間。CLの重荷を加藤が替わる。いつも思う</p>			

が加藤はすごい。葎平からは下り坂、南御室まではもうすぐだ。ここは北側で雪が多かった。

到着。冬期小屋もあるが狭い為、小屋の横に雪を均してテントを張る。ここは水場もあり助かる。小屋の中で食事の準備をする。皆で飲んで、食べてと言いたい所だが軽量化を図り過ぎた為、酒が足りない。だが、蠟燭の灯がユラユラと灯る中で、順番に自己紹介をし雰囲気が大いに盛り上がる。清水さんは甲府で『雀』という山の会のリーダーとして活躍。『飲んだくれの集まりだよ』と謙遜するが、清水さんの人柄に惚れた人達の集まりのようだ。『山梨の南に頑固にこだわりを持ち続けたい』という清水さんに、さすがCLの友人だけの事はあると感心した。連れの河野さんは中学の教師。そして唯一の独身女性。温和で気さくな人柄に好感がもてる。山ばかりでなく、山スキー、岩、そして今年の目標はバットレスと気炎を上げる。

又、少なくなった酒をチビリチビリ舐めながら、CLの間わず語りの力説が皆の心をうつ。山の歌をうたい、追悼歌をうたいながら『自分の廻りで人が亡くなるのはとても辛いものだ。自分の身体は、最終的に自分で守って欲しい。』と久し振りの友人との交友で過去の辛い経験を思い出したのか、つい涙するCLに感慨深いものを感じた。髪の毛の白さからその時の苦悩が伺い知れる。パーティのリーダーとして、私達の身の安全を常に考え、引率する責任の重さを抱えて行動しているという事を私達も十分認識し、せめて自分の身は自分で守る位の意識はもつように心掛けていきたいと、つくづく思った。

楽しく有意義な晚餐も、活気のある『～すそのレイホーよ～』の会歌を歌って終盤になる。『お～さむ。』小屋からテント迄、ピーンと張りつめた様な冷氣の中を急いでわたり、それぞれのシュラフにくるまり眠りの床につく。明日の朝は早い。



単独、無酸素でエベレスト登頂3ヶ月後にカラコラム山脈世界第2の高峰K2に挑戦し、快挙をなし遂げた後33才の若さで遭難した、女性登山家アリソンハーグリーブスのドキュメントがテレビで放映された。

『ママの最後の山を見たい』という二人の子供の願いを叶える為、父親がK2の麓迄連れていくプロセスと、プロの登山家としてのアリソンの偉業を随所に、カットを入れながらの記録である。プロとしては男以上でありながら、女性母親であるが為に非難の声もあり、その偏見に夫は強く反論していた。夫の理解があったからこそいい仕事が出来たのに違いない。アリソンの好きなチベットの諺に『羊として千年生きるより、寅として1年生きる方がいい。』諺どおりの生き方をしたアリソン、今は山の懷に抱かれて、満足して心安らかに眠っているのだろうか。女性に偏見を抱く男性こそ見て欲しい必見の作品である。 (加藤)

【ビデオはレイホー文庫にあります】



夏はにぎやかな夜叉神峠も
人ひとりいな冬



【雪まじりの山文-ホトノ木マツ】



↑ 左端が「芦安の鬼」清水さん 後藤とは20年来の友

↓ 今回も女性軍が奮闘した
右が檜形町の河野さん



山名	鷲岳 (2,780m) ・巒岳 (2,840m) ・城岳 (2,764m)		報告者	望月 明美
コースタイム	2月8日 (土)	起床1:00 出発3:00⇒薬師岳 5:15 ⇒観音岳 6:20 ~ 6:35 地藏岳 8:30		
天候	天候 (快晴)	南御室小屋11:15 ~12:00 ⇒夜叉神峠15:00 ⇒登山口15:40 →芦安温泉		
標高差	△S 南御室 2,420 ~ T観音岳 2,840	≒ 420m	体力度	1・2・3・4・⑤・6
	▼T 観音岳 2,840 ~ G夜叉神峠 1,380	≒ 1,460m	技術度	1・2・③・4・5・6
			展望度	1・2・3・4・5・⑥
参加者役割	CL	後藤 隆徳 49	清水、河野さんと交流できて意義深い。	
	SL	大根田元男 60	一日目のシャリバテには参った。	
	医療	佐野 雅道 65	年齢的にこの山は厳しかった。	
		高岡八千代 59	雪が多く大変でした。	
	記録	望月 明美 53	憧れのオベリスクに行きました。	
	食料	来生 博子 48	行程がなが〜くて大変でした。	
	会計	加藤 秀子 48	雪にはまり犬にペロペロ顔を舐めら嬉しい悲鳴?	
	ガイド	清水 准一 47	我が故郷芦安にようこそ。又来てね。	
	一般	河野 仁美 28	レイホーの皆さんの体力に圧倒されました。	
第2日目	<p>標高 2,500m底冷えと暗闇の中、1:00起床。昨夜の寒さと雪床のデコボコで熟睡出来なかった人がいた。元気印の加藤も寒さで、佐野も軽量化の為マットを持って来ずによく眠れなかったようだ。他のテントが寝静まっているなかを出発。アイゼンワカンを装着していく。直ぐに急登な登りをラッセル。未だ足跡は皆無。代る代る先頭交替。樹林帯の中で道は分かりにくい。所々で立ち往生、ヘッドランプの光で目印を探す。</p> <p>昨夜小屋に食事のおねだりに来ていた黒ぶちの野良犬(名犬・鳳凰丸とCLがつけた)も、いつの間にかついて来ている。遅しい犬だ。犬の直感で道を探させようと譲ると、グングンと先頭を歩き途中で必ず待っている。どうも登山者の食料のおこぼれを期待しているようだ。話によると芦安に住み、夜叉神峠から来たという。</p> <p>満天の星空、耳、鼻が痛い。特に夜明け前は冷気が厳しい。ラッセルはCL、大根田、来生、加藤、高岡の先導隊にお任せする。雪が少なく砂が多くなってきた。ガマの石、砂払岳を経て巨石の間を歩いていく。薬師岳着。うっすらと富士山がシルエットに浮かんでいる。観音岳着。眼前に北岳、甲斐駒が堂々と聳え、八ヶ岳、富士山がくっきりと姿を現している。正に観音岳の名に相応しい景観だ。この地点で佐野、望月はリタイヤ。清水さんは写真撮影の為ここへ残る。地藏岳へと向かう6名と別れる。</p>			

二人ですっかり明るくなった元の山道に戻る。途中砂払岳あたりで帝京大ワンダーフォーゲル部15名程と会う。挨拶も明るい。若々しく頼もしい。もっとより多くの若者が山を愛して欲しいものだ。南御室小屋に到着。皆を待つ。11:00頃CL、加藤戻る。次々と帰ってくる。皆元気だ。たいしたものだ。

12:00 南御室小屋を出発。シラビソ、ダケカンバ、コメツガの樹林帯を下る。心臓はきつい。肩は荷が重い。脚は張っている。己との我慢比べだ。やっとの事で夜叉神峠を過ぎ、やがて登山口に出る。くたびれた～。清水さんの案内で芦安温泉に入る。狭いながらいい湯だ～。憩いの一時至福の至。清水さんと同行の楡形中の教師の河野さんが会員に入会するとか、県外会員の友が増えた。バラエティに富み、健全な会の発展に幸あれ。

観音岳～地藏岳

加藤秀子

佐野、望月、清水さんの3人と別れてCL以下6名は地藏岳へと向かう。稜線の雪は風で飛ばされ少なく、白ザレが剥き出した。向かって前方に地藏岳のオベリスクが美しい。来生と河野さんは初めてのオベリスクに嬉々としている。左側には憧れの北岳バットレスの雄姿がで～んと構え私の心を騒がす。後方には薬師岳の向こうに富士のシルエットが優雅に聳え、稜線歩きは大展望を楽しみながらの贅沢な縦走だった。

CLは写真撮影で遅れている。私は待ちきれず先を歩き始めてしまった。(本来ならCLが来るまで待つ事) 結構なアップダウンを繰り返して地藏岳への最後の下りになった。下を見ると斜面が結構きつそうだが、5～6m先の所で何とか止まれそう。その先は見えなかったが、取敢えず其処まで行って、それから右の林へトラバースすればいい。そんな安易な考えで1歩2歩下り始めた。『しまった!』アイゼンが雪を捉える事が出来ずその儘滑ってしまったのである。見た目以上に傾斜がきつかったのだ。ピッケルも間に合わない。その時の感情をどう表現したらいいのか……。『とにかく何処かで止めなければ、この儘下まで一気にいったら終わりだ。』そう思った瞬間、下る前に目をつけていた少し突き出た小さな岩に、アイゼンをひっかける事が出来た。ほっとして下を見るとストーンと切れ落ちた絶壁である。

慌てた。後続で来ていた来生とCLに『此処はあぶない!』と叫んだが、その時には既に来生はお尻を落としていた。『あっ～』見ている前で滑り落ちてくる。だが辛うじてピッケルで身体を止めたようだ。『かとちゃん、ピッケルが効いたよ～。』笑って手を振る来生に、安堵と申し訳なさで嬉しさで涙が出た。『トップで歩くという事がどんなに大切な事か、分かっているのか! 自分が行けるから行くんじゃなくて、後続のパーティの安全を常に考えて行動するものだ。』とCLからこっぴどく注意された。

トップは船なら船長、飛行機なら機長である。その責任の重大さを考えれば軽率な行動は慎むべきだ。この時のCLの注意は骨の随までしみた。この経験は私にとって、とても大きなものになった。大根田、高岡、河野さんは林の中を下り何事もなく、オベリスクに到着。

私は・・・という、自己嫌悪で意気消沈し、観音岳から地藏岳までの往復の記録係でありながら、記録をとる心の余裕もなく職務を全うする事ができなかった。『ごめんなさい。』でも今回のこの経験は今後必ず生かしていきます。

